
テディベア NEXT

クラウディア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テディベア NEXT

【Nコード】

N9208A

【作者名】

クラウディア

【あらすじ】

テディベアの続編です。コナンと哀が恋人だという誤解はまだ解けていない。しかしコナンの気持ちに変化が・・・誤解は本当になるのだろうか？

第1話 終わらない

これはテディベアの続編です。

前回までのあらすじ

蘭はコナンに來たメールを見てしまい、コナンと哀が付き合つてると誤解してしまう。蘭に話を合わせるためコナンと灰原はデートに出かける。デートの帰りぎわに哀はコナンにテディベアをプレゼントしてもらう。しかし結局誤解は解かないまんまだった。

ここは、どこだ？・・・

そこは光に包まれた世界だった。

「工藤君・・・」

灰・・・原・・・？なんで灰原がここに・・・

「灰原・・・」

俺？何で目の前に俺が居るんだ？・・・

「灰原、俺、お前の事が好きだ。愛してる・・・」
もう一人の俺がそう言った。

「工藤君・・・」灰原はその後何か言ったが、口の動きだけで、灰原の声は、俺の耳に入ってこなかった。

代わりに聞こえてきたのは、蘭が俺を呼ぶ声だった。

「コナン君・・・コナン君・・・起きてコナン君・・・」

コナンはゆっくりと目を開けた。

「コナン君、早くしないと学校おくれちゃうよ！」

まだだるい体を起こし、横を見ると蘭がしゃもじを持って立っている。

た。

「ご飯早く食べちゃってね」蘭はそういうと部屋から出て行った。

「夢？・・・だよな・・・」

「はぁ」コナンはため息をつきながら思った。

（何で俺、こんな夢見ちまったんだ？たしか、この前も変な夢みたよな・・・）

コナンは灰原に会いたくなかったが、今日はいにく平日なので、しかたなく集合場所へ向かった。

（だいたい、何でまた蘭じゃなく灰原なんだ？とにかくこういう夢は早く忘れるに越した事ないな。ともかく今日は、あんまり灰原と話さない事にしよう！）

コナンは歩きながら、そう心に誓ったのであった。

第1話 終わらない（後書き）

あのテデイが帰ってきました！テデイNEXT！いや連載終わって
から数日もたっていないのですが、暇だったので・・・一応長編に
したいなっと思います。が、人氣がでなかったらたぶん元の話し60
%カットして連載というのも考えております。（ストーリーになる
のでしょうか？）でも前のストーリーとかあんまり関係ないかもな
んですよね。この話し・・・

第2話 灰原には秘密

コナンが寝坊した事もあり、コナンが来た時には、集合場所にはコナン以外の全員が集まっていた。

「遅いよー。コナン君ー」

「そうですよ。今日は時間にルーズな元太君が奇跡的に早く来たのに、君が遅れてどうするんですか！」

「そうだぞコナン！時間はきっちり守らないとな！」

「元太君が言ってどうするんですか！いつも僕達のことを待たせていて」

いつもと変わらぬ朝の面々。もちろんその中には哀も含まれていた。「おはよう。工藤君」いつもと変わらぬ調子で話し掛けて来る灰原。しかし早くもコナンの異変に気がついた。

「どうしたの？何か事件？」さっそくコナンに聞いてきた。

「いや、事件って訳じゃ・・・」

コナンは出来る限りいつもの調子で平静を装えるよう努めていた。

「じゃあ、彼女に正体がバレそうにでもなったの？」

灰原はそう聞いてみたが、そうではないとコナンの顔を見て察したらしく、また次の思想を言った。

「それとも、私に言えない秘密でもできた訳？」哀はクスと笑った。
(ギクッ)

哀が冗談で言ってる事は見てとれた。例えそうでなくても、哀はたぶん黒の組織関係で言ったのだ。

しかし、言葉的にはコナンに凶星だった。

「なっ、なわけねーだろ」コナンはまた灰原にいい訳言わないといけないと思っていたのだが、そこで歩美達が助けてくれたのである。

「ねえ！コナン君は新しく来た先生の事聞いた？」

「なんでも小林先生が1週間休む代わりにうちのクラスにくる代理の先生なんですけど、とてもきれいな先生らしいですよ」

「へー、もっと詳しく聞かせてくれよ」

コナンは歩美達の話しにうまくのっかり、哀との会話を中断させる事ができた。先生の話はそこまで興味はなかったが、灰原の話から自分を引っ張り出してくれるんだったら、コナンは、たとえば仮面やイバーの話しても喜んで話しただろう。

第2話 灰原には秘密（後書き）

テディNEXT第2話です。まだまだ本題にははいりませんね。気長にがんばっていきます。

第3話 先生

「はーい、みんな、今日から小林先生がお休みしてる間に、みんなの先生になる、

まえむら
前村 みゆ 美由です。みっちゃん先生って呼んでください。

歳は、22才です。この学校に早くなれるように、がんばります。今日の五時間目の学級活動はみんなと仲良くなれるように、みんなでゲームをしたいとおもいまーす。楽しみにしてねー」

今度新しく来た先生、通称みっちゃん先生、が自己紹介をした。見た目も若い感じの先生で肩より少し長い髪をさっきからずっと指で巻きつけたり、解いたりしている。

（何だ、このふざけた先生は・・・しかもみっちゃん先生って・・・）

そんな具合であまりよくは思わなかったコナンだが、クラスのみんなは、見た目がかわいいこの先生を一目できにいったみたいだった。

そして五時間目・・・

「じゃあ、まず最初にクイズゲームをしたいと思いまーす。みんな、用意はいいですかー？」

先生がそう聞くと、みんなが元気よく答えた。

『はーい！みっちゃん先生ー！』

「ルールを説明するよ。ルールは最初にみんなに立ってもらって、私が問題をだすから、わかった人は手をあげてね。それで、先生にあてられて答えがあつた人から座っていつてくください。最後だった人には罰ゲームがあるから、みんながんばってねー」

『ハイ』

こうしてクイズゲームはスタートした。正直言って、コナンはこの

ゲームは楽勝だと

思った。小学1年生が答えられる事なんてたかがしれてるし、どうせ虫とか先生の出身はどこかだろうと思っていたからである。しかし、そのコナンの読みは甘かった事が後になってわかる。

第3話 先生（後書き）

すみません。コナンが一言しか出てきてない……。哀はまったくでてきてない。本当にすみません。次もたぶんでてこない……。でもその次くらいからはいきなり急展開でコ×哀になると予定しております。

第4話 難関クイズ

「第1問、仮面ヤイバーの宿敵と言えば？」

先生のその質問にコナンを除いたクラスの全員が一斉に手を上げた。
『はい！はい！』と元気よく手をあげる声が教室じゅうから聞こえる。

驚きなのは、あの灰原までもが手を上げていることである。

そしてコナンの前の席の男の子が答えた、「ジャガイモ男爵です！」
そう言った後先生が「正解」と言うみんな大盛り上がりだった。

（仮面ヤイバーの問題なんかわかるかよ！）コナンはそう思いながらもクイズを解こうと必至になっていた。

その後もどれもこれも本物の小学1年生でしか答えられない問題で、結局最後は、コナンと哀だけが残ってしまった。

「次の問題は、初代ヤイバーの6話目のラストシーンでヤイバーが使った必殺技の名前は？」

（そんなの知るかよ・・・）

コナンはもう投げ遣り状態である。もちろん灰原の方も、クイズに答える事は諦めて、早く学級活動の時間が終わらないかと壁に掛かっている時計を見ているだけだ。

「うーん。時間切れ、正解は必殺ヤイバー雷神拳よ。どうして答えられないかな」

先生がそう言った時、俺たちの救いの音楽、チャイムが鳴った。それを聞くとコナンと哀にやっと安らぎの表情が戻る。

「あつ、コナン君と哀ちゃん放課後、準備室に来てね。」

先生は教室を出て行く時、楽しそうにそう言った。

生徒のほとんどが帰った放課後、二人は準備室に向かった。歩美達には、さっき理由を言って先に帰ってもらった。

何故自分達が呼ばれたのかは二人ともわかってなかったが、そんな
に大した話ではないだろうと思っていたのだった。

第4話 難関クイズ（後書き）

小説の中に出てきたヤイバークイズもちろんコナンファンなら解けたよね。（えっ、難しい？）では私からも一つクイズ、初代ヤイバーの4話目のタイトルは？！正解は漫画に載ってます。本題に戻るけど、やっと次からコ×哀です。やっと話が次で少し進めるかな、次もよろしく。

第5話 罰ゲーム

「失礼します」

二人が準備室の扉を開けると、そこでは先生が椅子に座ってコナン達を待っていた。

「さう、ここに座って」

部屋には先生が座っている椅子の他にもう二つイスが置いてあった。二人がイスに座ると、先生はニヤニヤして言った。

「今から罰ゲームしてもらいます」

その言葉だけで、コナン達には充分自分達が呼ばれた意味と、先生がうれしそうな理由がわかった。

コナン達はさっきのうんざりするようなゲームで、する前に先生が言っていた罰ゲームの事などすっかり忘れていたのだ。

「それで？ 私達はなにをすればいいの？」

哀が単刀直入に聞くと、先生はもったいぶって言った。

「うん。とっても楽しい事よ。何だかわかる？」

先生の、その質問にコナンは首を振った。先生の目線は灰原にも向けられ、灰原もコナンと同様首を振る。

二人の反応を見て先生は夢みごここに言った。

「それはね・・・甘いキスよ!」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

『えっ？』

その瞬間、二人は耳を疑った。

「今なんて？
・
・
・
・
・
・
・

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

L

「だから、コナン君と哀ちゃんできスをするのよ! やっぱり罰ゲー

第5話 罰ゲーム（後書き）

あゝ／＼／＼／＼自分で書いてて恥ずかしい・・・やっぱこんな設定やめればよかったかも・・・でもでも、私の中では、これぞコ×哀なんですよね。だいたい原作だはいええない領域に入ってきてるし、私のモットー、コ×哀は原作でもありえそうな話しだけっていうのが守られてない・・・どうしよう・・・まあ、今回だけ多めに見るか！

第6話 だって相手は灰原だぜ・・・

「あら、二人とも嫌なの？」

先生は、二人がそんなに驚くのが不思議というように聞いてきた。

「まずはあなたから聞こうかな」

今言った、あなたと言うのはコナンの事である。

「あなたは哀ちゃんとキスしたくない訳？」

コナンは先生にさあどっち？さあどっち？と責められてコナンは仕方なくこう答えた。

「別に・・・嫌ってわけじゃ・・・」

そして今度は先生のターゲットが灰原に移る。

「あなたはどっちなの？！」

「・・・・・・・・私も、嫌ではないけど・・・・・・・・」

「なーんだ。やっぱりそうなんじゃない」

先生は灰原が自分の言わせたかった台詞をよくぞ言ってくれたとばかりに、ぱっと顔が明るくなり、コナン達を無理やり向かい合わせた。

「さっ！さっそく始めてちょうだい。私は居ないものだと思ってね」
そう言う先生は柵の影にかくれに行った。

一方コナン達は、コナン達がキスをするのを楽しそうにずっと待っている先生と違い、とてもこの状況を楽しむ余裕はなかった。

二人の間に沈黙が続いたが、しばらくすると哀が口を開いた。

「どうして？・・・嫌って言えばいいのに・・・」

口に出すつもりはなかったのに、気がつけば哀は自分の心をそのま

ま言葉にしていた。

それに対してコナンは・・・

「嫌じゃねーのに、嫌だって言えるかよ・・・」

（あらあら、いい雰囲気じゃないの／＼／＼）

先生はコナン達を遠くから見てもそんな事を考えていたのだが、このころになると、もう二人は先生の事など忘れていた。

第6話 だって相手は灰原だぜ・・・（後書き）

いよいよコ×哀ですね！でも私、またこんな恋愛小説書いた事を後悔してます・・・最悪な事に、親がこの小説を見たい！と言っているのです。ああ、神よお助けください・・・。でもでも、小説の進みぐあいのには絶好調ですよ！だいたい1話の下書き書くのに15分くらいと私にしてはよくやったと思いますよ。本当はこの6話は準備室にコナンと哀が閉じ込められる。という話だったんですが、こんな先生ありえないと思い、ノートを2ページも破りました。でもどうしてもその作品が見たいって言うなら・・・・えっ？見たくない・・・・あっ、そう・・・

第7話 いったい俺は・・・

「キス・・・だけど、もしお前が嫌じゃないんだったら・・・キスしてもいいか?・・・」

何故そんな事を言ったのかは、コナン自身わからなかった。普段のコナンだったら、こんな事絶対言わないだろう・・・けど、今、コナンは、自然とそう言いたくなった。哀はコナンが言った後しばらく間をおいてから明るく言った。

「そうね。江戸川君がそんなに私とキスしたいっていうなら、してあげてもいいけど」

哀はそう言ってから、今の自分の言葉を後悔した。

すなおに喜べない私・・・
本当はすごくうれしくせに・・・
心の声と言葉にした時の違い・・・
いつだってそう・・・

そんな気持ちが哀の心を苦しめる・・・

でもコナンには、その言葉がうれしくて・・・

素直じゃない灰原がかわいくて・・・

「それは、OKって事だよな・・・」

コナンはいつの間にか笑顔になっていた。

コナンが一步前に出る。たったそれだけで、灰原の顔がまじかに迫

った。

俺何やってるんだ・・・俺、今灰原にキスしようとしてるのか？
何で、俺そんな事するんだ？・・・だって相手は灰原だぜ・・・

そう思っているけど、・・・
もう・・・俺は止まらない・・・

コナンの手が、灰原の頬に優しく触れる。

・・・俺は灰原に・・・

そして、コナンの唇が、哀の唇に、もう少して重なる。

・・・キスしたい・・・

『ガラ』「おーい！コナン！」

その時、タイミング悪く、なんと少年探偵団が部屋に入ってきた。
いち早く気づいた灰原がコナンの体を強く押し離す。

コナンも慌てて灰原から自分の体を離れた。

さいわいみんなにその姿を見られなかったものの、逆に体を離れた
姿はすごく不自然だった。

二人とも同じ部屋にいるのに、何故か二人とも正反対の方向を向い
ているからだ。

「何してるの？二人共・・・」

元太と光彦の間からひょっこり顔を出した歩美が言った。

どうやらみんなは、コナン達の事をこっそり待っていたが、なかなか来ないので心配で見にきたらしい。

「まったく、おめーらタイミング悪すぎ……」
コナンはそう言ったが、歩美達には意味がわかる訳もなく「とにかく早く帰ろう」とコナンと哀の手を引いた。

「あれ？　そういや、あの先生どうしたんだ？」
「今まではすっかり忘れていたあの先生……」

「ああ、みっちゃん先生なら、さっき廊下であった時コナン君と灰原さんに『二人と共合格』って言う伝言を僕達に託して家に帰ったみたいですよ。いったい何の事なんですか？」

「ハハハッそっかよかった……」

（結局俺達は、あの先生の気まぐれな遊びに付き合わされただけじゃねーか……はあ〜）

第7話 いったい俺は・・・（後書き）

すみません！今気がつきました。この小説のタイトル、テディベアではなくテディになってましたね……。あらすじのところもテディの続編、と書いてました。すみません。今の今まで気づかなかったなんて、私ってなんて

ドジ……。いつも略してテディと読んでいたもので、そのまんま書いてしまったんです……。あつ、話は変わりますが、ここのシーンのもう1つの話、よし！では期待にこたえて出すか！と思ったのですが……。ない、ない、家のどこをさがしても1枚しかない！後半分はどこへ行ったのやら……。まあ、話は2日前に書いたばかりなので覚えてますから気にしない、気にしない！……。遅くても来週までには載せると思います。それとですね。NEXTだけにラブ度もパワーアップ！長さもパワーアップ！なんですけど結局哀ちゃんとかナン君はキスしなかったですね……。じれったいと言うか、何と言うか……。でも、テディベアNEXTはまだまだ続くのでした！という事でゆるしてくださいな。（ちなみに作者の遊び心もパワーアップ！）

第8話 西の高校生探偵

・・・どうして？・・・

どうして私は工藤君とキスする気になったの？・・・

それに工藤君だって・・・

あんな子供騙しの罰ゲーム、ちょっと頭を使えば回避する方法だったくさんあったはず・・・

工藤君だって知ってたでしょ？

あそこで吉田さん達が来てくれなかったら本当に私達・・・

だって工藤君には大切な彼女がいるのに・・・

『パチン』

灰原はパソコンの電源を切った。

やめましょう、こんな事考えるの・・・いくら考えたって答えは決まってるのに・・・彼が愛しい人は彼女・・・

哀はそう思い気分転換にコーヒーでも淹れようかと地下室を出て一階に行った。

するとそこではコナンと、それからもう一人服部の姿があった。

「あら、服部君来てたの・・・」

哀は素っ気無く服部に挨拶をしたが、内心は、コナンと二人だけにならなくて本当によかったと服部に感謝していた。

「よう！ちっさい姉ちゃん、ひさしぶりやな！」

「ええ、そうね。紅茶でも淹れる？」

哀はテーブルに写真や紙以外になにものってない事に気がついて言った。

「ああ、頼むわ。あつそれと、何か軽い物作ってくれへんか？何や腹すいてもーて」

どうやらこの様子だと、急ぎの事件とかではないらしい。

「サンドイッチでいい？」

哀はそう聞くと、すぐ台所に向かった。

その時、今の二人の会話を不愉快に見ていた人物がいた。その人物は哀が行ってしまったのを確認すると声を潜めて言った。

「おめー、灰原にちょっと馴れ馴れしいんじゃないか？まだ、おめーら今まで真面に話した事もなかったくせに・・・」

どうやらコナンは灰原と服部が仲良くするのが気に食わないらしい。

第8話 西の高校生探偵（後書き）

西の高校生探偵服部登場！やっぱりこの人も一度くらい登場しないとね。それと特別篇の事なのですが、あれはコナンが哀を好きだと言いう設定なので、ああなんです。別にコナンがくるったとかそういう事ではないので、たしかにいきなりキスはないと思いますが、コナン君が哀を死ぬほど好きならあれもありかなと・・・あつても特別篇ではコナンは哀の事を好きでも、本篇では違いますので、

第9話 蘭以外のやつなんて・・・

「へっ？　そうか、俺は普通に話しただけやけど・・・」

「だいたいなあ・・・」

その時、灰原がコナンに近づいて来たので、コナンはしかたなく話を切った。

「はい、サンドイッチ、昼食の余りだけど、それと紅茶。他に何か用があったら言って、私地下室にいるから」

哀はテーブルの上にサンドイッチと紅茶を置くと、さっさと地下室に戻って行った。

哀が姿を消したので、コナンはまた話を続ける。

「おめーなあ、服部、遠慮ってものを考えろよ」

さっき灰原が地下に降りていくさいに服部に向けた笑顔が、またさらにコナンを不機嫌にさせた。

「そうは言うてもなあ、俺は客人やぞ、これぐらいええやんけ・・・
・・・はっ、わかったで！」

そう言って服部は手を叩いた。

「工藤、自分きつと、俺にやきもちやいてんや！　そやそや、絶対そうや！」

服部はうれしそうに興奮して言った。

「やきもちって、お前と蘭に？・・・」コナンは怪訝な顔をする。

それを聞いて服部は笑って手と首を振る。

「ちやうちやう、工藤、あんたと姉ちゃんは公認の仲なんやから、

そんなんで嫉妬する必要ないろ、だいたい俺相手に嫉妬する気にならへんやろ？」

「んじゃー誰何だよ。俺が嫉妬する相手ついたら蘭しか・・・」

「本真に分からへんのか？」

「ああ、蘭以外のやつなんて興味ねーしな」

普通、自分の嫉妬の相手くらい、どんなにそっちに疎い人でも分かるだろうと服部は思っていたのだが、コナンはまったく分からないみたいだった。

「ほー、こんなやつが地球上におったんか・・・・・・・・・・」

第9話 蘭以外のやつなんて・・・（後書き）

服部…「本真に分からへんのか？」

コナン…「ああ」

服部…「いや、工藤、お前はとっくにもう分かってるはずや、隠さんでもええがな、俺は気づいてたんや・・・工藤は俺の事が好きやっちゅう事がな！」

コナン…「つち、ばれてたか・・・って、誰だよ台本すり替えたやつ！！！」

スタッフ…「撮り直しますか？兄貴・・・」

監督…「いや、いい・・・それより家に帰って録画予約してこい・・・」

第10話 ごつつ頭のええ工藤君？

「ほら、おるやんか！美人でかわいくて、工藤ともよー話して、ごつつ頭のええ姉ちゃんが」

コナンは服部がそこまで言ってもまだわからないみたいで・・・

「頭のいい女ねえ・・・俺が話す女つつたら、蘭に、母さん、園子に、親戚のおばさんだろ、歩美ちゃん、・・・・それから・・・・」

コナンはそこで急に口を噤んだ。

「どや、やっとわかったか」

「・・・・お前の言いたい事はわかったけどよー、いくらんでもあいつはないだろ・・・・」

今のコナンには、服部の目に自分がそう写った訳さえ理解できなかった。

「さよか？でも、聞いたで工藤、どうしてそうなったかは知らんけど、あのちっさい姉ちゃんと付き合い始めたそうやないか、・・・・ただ気になるんは工藤のもとガールフレンドの姉ちゃんや・・・・・工藤、もしかして前の姉ちゃんに愛想つかされたんか？それやったら工藤がああちっさい姉ちゃんと急に付き合い始めたんも、だいたい想像つくけど・・・・」

「あっ、それは・・・・」

服部が自分の考えをあれこれ話し始めたので、コナンは手っ取り早く、服部に事情を説明した。

それを服部はサンドイッチを食べながら聞いていた。

「ほー、そら工藤んも大変やったなあ。まっ、工藤がまいた種やしやーないな」

「だろ？おかげでいろいろ大変なんだ・・・」
コナンは気を落として言う。

「せやけど工藤、いい機会やから言わせてもらいますけどなあ、もしこの先、そのアホトキシンちゅう薬が手に入らんくて、もとに戻れんかったとしたらや・・・」

（アポトキシンだよ、何だよ、『アホと奇人』って！）

声には出さなかったがコナンは密かに突っ込みを入れた。
服部は話を続ける。

「あの姉ちゃんの事諦めて、さっきのちっさい姉ちゃんに乗り換えの方がええんとちゃうか？」

第10話 ごつつ頭のええ工藤君? (後書き)

久しぶりに更新できました! っで感じです。いやしかし、服部と工藤の話長いなあ・・・でも後最低でも1話は続くと思います。ちょっと最近学校とかいそがしくてなかなか更新できないかもしれませんが、最後まで読んでいってください!

「……ってな訳だから、まだしばらく帰れそうにねーんだ」

「新」

「ん？」

「ごめん、もう切るね、これから買い物いかなきゃならないから。」

（ツーツーツー）

「ったく！、蘭のやつ……」

電話は一方的に切れてしまった。通話時間はまだ1分とたっていないのに、コナンはやきもきしながら電話ボックスを出た。

最近電話をかけてもずっとこんな調子で、何かあるんじゃないかとコナンが思う日もしばしばだったが、蘭が話を切るさいに使う、『買い物に行く』や『キャッチホンが入ったから』、『お湯が沸いた』などどれも本当の事だった。

☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆~~~~☆

その日の晩、コナン達は3人で食卓を囲みながらテレビを見ていた。特に蘭はテレビを食い入るように見つめていて、声をかけるたびに人差し指を立てられた。

その蘭が毎週夢中になっているテレビ番組とは、テレビドラマ『薔薇には刺がある』いわゆる昼ドラのようなものだ。

しかも今回は第一章の最終回、ヒロインが恋人と結婚するシーンだった。

「いいなあ、私もウェディングドレス着てみたいなあ」蘭はテレビ

画面相手にうつとりしながら言った。

そんな蘭を見てコナンも蘭のウェディングドレス姿をちよつと想像してみたが、思わず何かテレてしまう。

「でも、この二人性格が正反対なところあるから、新婚生活がどうなるのか、第二章楽しみだな」

テレビが終わっても、蘭はまだ興奮冷めやらぬといった感じで、ああだこうだ、と今後の展開予想をべらべらと喋っていた。

（新婚生活か・・・）

コナンはコナンで蘭との新婚生活を夢みニヤニヤしていた。

（子供は一人は欲しいだろ、新婚旅行はハワイで、家は一個建て、できれば米花町がいいだろ、

蘭に朝昼晩食事を作ってもらって、休日は二人でゆっくり過ごすだろ・・・そういやあ、結婚するって事は、やっぱキスとかもするんだらうな・・・）

当たり前前の事、だけど新一はそれまでその事を考えた事すらなかった。

（蘭と・・・俺が・・・キス？・・・）

~~~~#コナンの想像#~~~~

蘭..「新一・・・」

キラキラした瞳で俺を見つめる蘭。

新一..「蘭・・・」

そして二人はキ・・・うああ~~~~!!!!!! ストップ！  
ストップ！

コナンは行き成り自分の妄想に待ったをかけた。

(違う・・・何か違う!どこか違う!・・・俺まだ17だし、いや、もう17なんだけど、探偵だし、・・・関係ないけど・・・勿体無いっていうか・・・これも違うんだけど・・・ああ、何が言いたいんだ俺・・・)

自分の気持ちにコナンは勝手に困惑しだした。

(ちよつと待てよ、況してや蘭と寝るなんて・・・『無理、想像不可』・・・どうしてなんだろう?)

嫌って訳じゃないんだけど・・・ただ違うって感じがするんだよね、だったら何が違うんだ?って話になるけど・・・うゝん、わかんねーな・・・)コナンはこの悩みに一晩中悩まされるはめになる。

小五郎..「おい、コナンのやつどうしたんだ?一人で頭抱え込んで・・・」

蘭..「きつとそういう年頃なのよ・・・」

その後の二人は暖かい目でコナンを見ていた。

## 第11話 蘭と新一（後書き）

だいぶ更新遅れちゃいました。でも、休日小説書きまくったから、だいぶ溜めができたかな。それにしても今回の話は、今までからしたら長いですね。蘭の話は、作者からしたら気に食わないですが、がんばって書いていきます！

## 第12話 相談（前書き）

事情により本文の終わりの方を少し削除しました。削除した文は修正を加えて次回の第13話の始めに入れるか、12話の最後に入れる事にします。

## 第12話 相談

「……………つという訳なんだ。どう思う？」

コナンは結局一晩考えてもわからなかったので、自分の考えを服部に相談していた。

服部…「うーんそやな、たぶんやけど、工藤、本真は姉ちゃんの事好きやない

んちゃうか？」

コナン…「はあ？俺はずっと蘭の事を好きだったんだぜ。そんな急に変わるか

よ」

服部…「問題はそこや、もしかして、工藤は姉ちゃんの事、もとから好きやな

かったんとちゃうか？そもそも誤解やったとか」

コナン…「誤解……？」

服部…「よくあるんや、長く一緒に居すぎてしてもて、友情愛や家族愛を恋と

間違えてしまう事がな」

（間違える……………誤解……………）

服部が言ったその言葉が何度も何度も、コナンの頭の中でリピートされ、心の奥深くに染み渡るような感じがした。

コナン…「なあ、それってどうやって見分けられるんだ？」



服部…「どうやって、って言われてもな、・・・見分け方は十人十色やし、そ

もそも人の感情なんて、解釈の仕方でも何でもとれるかな。自分

でそうやと思ってても間違ってる事がある。けど、それを知るすべは

やっぱり自分の感情しかないんや。

だから俺がただ言えるんは、工藤が今してる恋は偽りかもしれないへん。

そうゆう可能性もあるっちゅう事だけや。それと、自分に正直にな」

さすがコナンの親友、コナンが本気で悩んでいると知ると、真剣に相談にのってくれた。

服部…「じゃあ、俺はこれから親戚のお婆はんの葬式行かなあかんから、ほな

工藤、がんばれや」

服部の声の後ろで「平次く！」と呼ぶ声が聞こえると服部は急いで電話を切り上げた。

服部との電話の後もしばらくコナンは公園のベンチに座っていた。

「間違える・・・誤解・・・偽りの恋・・・」

もう何回その言葉を口にしたのか分からない、ただコナンは新一だった時の蘭との思い出を振り返りながら呪文のように言葉にしていた。

一つ一つが鮮明に、まるで昨日の事だったかのように蘭との思い出が目蓋に焼き付いている。

「一緒に遊びに行ったり・・・勉強したり・・・学校行って・・・事件に巻き込まれた事もあったけ・・・すごく楽しかったなあ」

あいつの笑顔を見るたびに嬉しくなって、あいつの傍に居れる、それだけでよかった。

いつも明るく話しかけてきてくれるあいつに、今度一緒に遊園地行こうとか・・・花火大会に行こうって思ってた。

### 第13話 蘭の気持ち

蘭の事は好きだ・・・これははっきり言える

でもそういうのじゃないのかも・・・

たぶん俺が本当に好きになるやつは他にいて、蘭が恋人として好きになる相手も他にいる

俺の中で一つの結論が出た。

「コナン君？こんな所で何してるの？」

コナンが顔を上げるとそこには買い物帰りの蘭が居た。

「えっ、うん。ちょっと考え事・・・」

蘭は手に持っていた買い物袋を地面に降ろした。見るからに重そうな袋を見ても分かるが、蘭は袋を抱えて立っているだけでも辛かったみたいだ。

「考え事？あっ、分かった哀ちゃんの事ね！」

「えっ？灰原？」

そう未だに蘭には本当の事を言っていない。コナンは別に言おうと思ってもいなかったが。

「あっ、その顔は凶星ね」

そう言って蘭は休憩がてらコナンの隣に座った。

無論コナンはそんな事思っていなかったのだから、コナンの顔のどこをどう見て言ったのか知らないが、蘭は自信満々に勝手に解釈していた。

「どう？最近上手くいってるの？」

「うん。上手くいってるよ・・・」

そうだ、この事はもっと早く気づけたはずだ。

もし本当に蘭の事が好きなら、例え江戸川コナンと言う仮の姿であっても、蘭に彼女がいるって思われたくなかったはずだ・・・

「そう、よかった」

・・・でも俺は全然平気だった・・・その時、俺は決心した

「あのね、蘭姉ちゃん・・・もし新一兄ちゃんに蘭姉ちゃんに対する気持ちは恋人とかじゃなくて家族愛みたいなものだって言われたら、蘭姉ちゃん傷つく？」

聞いてしまった・・・蘭の事だからきつとすごく悲しい顔をするかもしれない

普通こんな事、突然子供が聞いて、真面目に答えてくれっていう方が難しい、けどコナンの真剣さは蘭にちゃんと伝わっていた。そしてしばらく間をおいてから蘭の返事が返ってきた。

「傷つかない・・・かな・・・」

(えっ?・・・)

「私気づいたんだ・・・新一の事好きだけど、恋人になりたいんじゃないって・・・コナン君の言う通り本当は新一も私の事そう思ってるから・・・」

知らなかった・・・俺は蘭の事好きで蘭も俺の事が好きだって思ってた

だけど蘭はとっくの昔に気づいてたんだ・・・俺より先に、俺の心を・・・

「蘭・・・実はさっき言った事、本当なんだ・・・新一兄ちゃんが

蘭に伝えといってくれて・・・」

できるなら言いたくない。けど言わなければいけない事だ。

「そう、新一の口から直接聞きたかったな・・・」

蘭の目から一滴の涙が零れた。

「蘭姉ちゃん・・・如何して泣くの？」

「分からない・・・けど、もう今までのようには新一と一緒に居られないのになって思ったら・・・涙が止まらなくなってる・・・」

蘭はポケットからハンカチを取り出して溢れ出る涙を拭いた。

「そんな事ないよ！・・・例え恋じゃなくても新一兄ちゃん蘭姉ちゃんの事が好きだから、きつと変わらないよ！新一兄ちゃん蘭姉ちゃんの笑顔を見てると幸せになれるんだって、だから・・・もう、泣かないで、蘭姉ちゃん・・・」

変わりたくない。そう・・・例え蘭への愛し方が変わっても、俺はずっと蘭の傍に居たい、今まで通り一緒に笑い合いたい。二人がそう願っている限り、俺達の距離は変わらない。ずっと、永遠に・・・

「そうだよね。泣いてなんかいられないね。私、新一の恋を応援しなきゃいけないのに」

蘭はそう言って笑った。まだちょっと悲しそうだけど、幸せそうにしている。

でも俺の恋を応援？新しい恋に生きろって事か？

「新一兄ちゃんの恋？」

コナンが蘭に聞いてみると蘭は一瞬言うか戸惑ってからこう言った。



高木刑事の話によると・・・

高木刑事は今、小学生の女の子を殺人目的で誘拐し、自らを瑠架島と名乗る誘拐犯について調査してるらしい。被害者はすでに分かっているだけで4人でており死体はどれもその子を誘拐した町の公園に『我が名はルカ島☆』というカードと共に茂みなどに置かれていた。しかも誘拐するのは決まって火曜日だという。そして先週の火曜日に小学生の女の子二人がこの町で行方不明になった事から瑠架島の仕業ではないかと睨んでいる。つまり怪しい人物がこの公園に来ていないかどうかなどを見にきたのだという。

そして一通り高木刑事の話が終わったところでさっきまで黙っていた蘭が青い顔をして急に立ち上がった。

「ちょ、ちょっと待って！今日って問題の火曜日よね？」

「ああ、そうだけど・・・狙われるのは小学生だけだから蘭さんは大丈夫だよ」

「そうですけど、そんな人がうろついてるかもしれないのに・・・やっぱ私、もう帰ります」

蘭がそういうので、コナンと蘭はその後すぐ家に帰った。蘭は人とすれ違うたびにびくびくしていたけど、家に帰ると、さっきまでの恐怖はすっかり忘れて、鼻歌交じりに夕飯を作っていた。

### 第13話 蘭の気持ち（後書き）

次は予定しておりました『新一と哀馴初め篇』を後回しにして読者のみなさまの声により次回から急遽作成することにした『事件篇』に入っていきます。予定していなかっただけにだいぶ投稿に時間がかかると思います。



## 第14話 火曜日の危険

「で？何なんだよ、話って？」

コナンは、今阿笠博士の家にいた。10分ほど前に電話で、『話があるから今すぐ来てくれ』とただならぬ様子で言われたからだ。

「実は哀君の事なんじゃが・・・」

博士は電話口で話した時と同じように心痛した声で話を切り出した。

「夕べから家に帰っていないみたいなんじゃよ。わしも心配じゃったが夜12時には寝てしまったから、もしかしたらその後家に帰って来ていたのかもしれんが・・・」

「灰原から連絡は？」

コナンがそう言う博士は「残念ながら一通も・・・」とさらに空気を重くした。

「探偵バッチは置いてってるようじゃから、彼女の携帯の方にかけてみたりしたんじゃが繋がらなくてのう・・・」

「そうか・・・」

灰原が泊まりがけで出かけれる所もないだろうし、第一灰原には俺達以外に知り合いがない。

灰原だったら家出という場合も充分考えられるが・・・だとしたらどこを探していいのか見当もつかない。

もしくは何かの事件に巻き込まれているか、組織絡みかも・・・そう言えば、昨日は火曜日だったな・・・たしか、ルカ島の被害者

は・・・！？コナンははっとした。

「おい、博士・・・ルカ島って誘拐犯知ってるか？」

「ああ、知つとるぞ、前にニュースで大々的にやってたからの・・・じゃあ、まさか哀君は・・・」

博士は唾をぐくんと飲み込むとへなへなと力なくソファに座り込んだ。

「まだ確証はねーけどな・・・」

それからコナンは警察に連絡して、最近起こった事故や事件などのについても調べてもらったが、灰原に関係しそうなものは何もなく、灰原探しはゼロからのスタートとなった。



「・・・・・・・・くどう・・・・・・・・君？」

それはまぎれもなく灰原の声だった。だが、その声はおびえている感じではないが、妙に落ち着いて静かな声だった。

「はっ、灰原か！？・・・・お前、今どこにいるんだよ！無事なのか？・・・・」

「私は大丈夫・・・・」

灰原はぼそつと言った。

「誘拐されたのか？犯人は！？」

「分からない・・・・」

分からない・・・・という事は誘拐されたという事だろう。自分で家出して『分からない』とは言わないだろうから。

「んで、今どこにいるんだ！？」

誘拐されたのならいつ電話を切られるか分からない。ましてやあの強悪殺人犯のルカ島だ。見つかったら灰原が殺される危険だって十分ある。重要な情報を早く灰原から聞かなければ、とコナンは急かすように聞いた。

「今・・・・米花駅の向かいにいる・・・・・・・・」

「分かった。それで犯人は・・・・」コナンが犯人の事を聞こうと思った時、電話は突然切れてしまった。

犯人に見つかって切られてしまったのだろうか？だとしたら、もう

二度と灰原からの連絡はないだろう・・・だが、米花駅の前という大きな手懸りを手に入れる事が出来た。  
コナンはスケートボードに乗り米花駅に向かった。

## 第15話　こんな時に・・・（後書き）

哀.. 「蘭さんも誘拐されたのね」

コ.. 「大丈夫、俺が二人共助けてやつから」

哀.. 「二兎を追う者は一兎をも得ず・・・もし周りの人みんなが誘拐された  
ら誰を助ける？言っとくけ

ど、全員はなしよ」

コ.. 「そりゃーもちろん・・・」

哀.. 「・・・」　蘭「・・・」

コ.. 「阿笠博士！あれだけの発明品ならがっばり儲かるからな！」

哀.. 「・・・」　蘭.. 「・・・」

蘭.. 「私これから新井出先生の事好きになろうかしら」

哀.. 「博士！私を娘にしてちょうだい！遺産は誰にも渡さないわ！」

博士.. 「・・・ワシってもしかしてモテモテか？」

## 第16話 一人

コナンはその後すぐスケボーに乗って米花駅に向かった。

博士は「新一！どこに行くんじゃない？！哀君はどうなったんじゃない？！」と聞き、引き止めたが、コナンも急いでいたので「大丈夫、灰原は俺が助け出すから！」と言うだけで出かけていった。

☆~~~~☆~~~~米花駅の前~~~~☆~~~~☆

コナンは途方に暮れていた。

（どう言う事だ？・・・どこにいるんだ灰原は・・・）

コナンは米花駅に来たはいいものの、米花駅のすぐ前には道路があり、その先には喫茶店やコンビニがあるだけで灰原を監禁できそうな場所は一軒もなかった。

もしかしたら、米花駅の向かいと言うのは嘘で、ただ灰原が犯人に言わされていただけかもしれない。

だとしてもどうしてそんな事をわざわざやる必要があるんだ？・・・

・

コナンがそう推理していた時、携帯に高木刑事から連絡があった。

それは、ルカ島が容疑者から外れたと言うものだった。

「ルカ島の正体は一昨日からもう目星はついていて、警察がずっとマークしていたんだけど、今朝早く証拠がとれて捕まったらしいから・・・」

コナンはそう高木刑事に告げられた。

「ルカ島じゃないとしたら、いったいだれが灰原を・・・」

灰原から聞けた米花駅の向かいと言うのも無駄足になってしまった

し、これで犯人の事もまったくわからなくなってしまった。

一旦博士の家に帰ろうかとも思ったが、コナンはただ闇雲に灰原・  
・と蘭を探していた。

するとまた非通知の電話が掛かってきた。もしかしたら犯人かもしれないと思いながらコナンが携帯を取り出すとやはり相手は犯人からだった。

コナン…「何が目的だ?・・・金か?・・・灰原は無事なのか?！」

犯人…「ああ、・・・まだ、無事だよ。私は何一つ人質には危害を加えてない・・・せっかくだから声を聞かせてやろう」

どういふつもりかは知らないが犯人がそう言ったので、当然コナンは灰原の声が聞こえてくるだろうと思っていた。しかし・・・

「新一! 助けて! 新一!!!!」

コナン…「ら、蘭!?!」

どういう事だ? この誘拐犯は、灰原の誘拐犯じゃなく蘭を誘拐したやつなのか? たしかにこの犯人は最初に「お前の友達を誘拐したのは私だ」と言っただけで灰原とは言わなかった。

そう言えば、何故灰原の誘拐犯は俺にかけてきたんだろうか?

コナンはさまざまな疑問が浮かんだが、取り敢えず置いとく事にする。

コナン…「蘭! 蘭なのか? 大丈夫か?！」

犯人…「言っただろ? 私は何一つ人質には危害を加えていないと・・・



心配しなくても君の恋人は無傷だよ・・・もちろん友達の方もだ・・・」

・・・友達？・・・恋人？・・・

コナン・・・「どう言う事だ？灰原もそこに居るのか？」

犯人・・・「ああ、君の恋人の隣でいい子に寝てるよ・・・さっき私の目を盗んで電話をしていたみたいだから・・・おっと、お喋りがすぎたようだ。工藤君・・・君と話すのは楽しいが、何せ時間がないものでね」

そこで犯人は「クツクツ・・・」と耳障りな音で笑った。

犯人・・・「さあ！ゲームの始まりだ！君にはこれから重要な選択をしてもらう」

コナン・・・「・・・重要な選択・・・コナンは嫌な予感がした。

犯人・・・「友達と恋人・・・どちらがいい？どちらか一人だけ返してあげよう。けれど選ばれなかったもう一人には二度と君に会えなくなってもらおう・・・本当は二人共そうしたいんだが、彼女達に罪はないからね・・・」

コナン・・・「何？！！」コナンの嫌な予感は見事に的中した。やはり探偵の感というやつだろうか？

いや・・・違うと思うが・・・

## 第16話 一人（後書き）

何かあんまり事件という感じがしませんが、ちゃんとこれから推理？&事件っぽく努力していきます。ちなみにこの事件ネタは映画からとったものなので私はあんまり考えてないです。映画見た方はごめんなさい。私も『事件、事件』とノイローゼになるくらい考えたのですが結局浮かばなかったんです。努力だけはしたんですけど・

## 第17話 少年探偵団

「タイムリミットは今日の12時まで、それまでにどちらか決めてくれ」

12時までというと、今4時だから後、8時間・・・それまでに蘭か灰原を選べだど!?  
そんな事無理に決まってる。

でも犯人の目的はいったい何なんだ?それに、犯人が言ってたあのゲーム、もし俺が二人の内どちらかを選んだとして犯人にいったい何の得が・・・

「・・・!」

「哀ちゃん、大丈夫かなあ」

「やっぱり、あの何度も博士の家に電話をしてきた人が怪しいですよ!」

「でもそれってよ、ただの間違い電話だったんだろ?」

コナンが自分の家のすぐ近くの角を曲がろうとした時だっただろう  
か、光彦や歩美、元太の声が聞こえてきたのは、  
コナンが角を曲がると、すぐ歩美達の姿が見えた。

「あっ、コナン君!」

3人の足が止まる。

「よう、おめーら」

「コナン君、私達コナン君の事探してたんだよ」

歩美は不機嫌にコナンに話掛けた。

「えっ、俺？」

「そうですよ。灰原さんが居なくなっただっていうのに、今こそ少年探偵団の出番じゃないですか！」

同じく光彦も不機嫌な顔をしていた。

「警察の人も探してくれてるのに全然見つからなくて・・・」  
みんなの顔が徐徐に暗くなっていく。

そっか・・・お前達も、心配なんだな・・・

「大丈夫だよ。灰原なら・・・俺達少年探偵団だろ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

3人がコナンを見つめる。

「・・・・・・・・そ、そうですよね。灰原さんは僕が絶対助け出してみせます!!!!」

「歩美もがんばる!!!!」

「警察になんか、任しておけねーぜ！俺達で犯人を捕まえてやる！  
」

そして、光彦の声を合図に3人はやる気を取り戻した。

## 第18話 目的

「・・・つまり、お前達はその博士の家の前で電話をかけてきたやつが犯人だと思ってるんだな？」

コナンは少年探偵団から重要な手掛かりを得た。

光彦が言うには、光彦の母親がこの家の前をたまたま通りがかった時、博士の家の前で電話を何度もかけていて、見るからに不審な人物がいたらしい。

「だって、その人以外考えられないじゃないですか！その人最初は博士の隣の家の工藤っていう家の前でその家の窓を見つめてたそうです。そして電話をかけると繋がらなかったみたいで、あっ、その時ちょうど博士の家の方から電話の音がしたって言ってましたよ。そしたらその男、今度は博士の家を覗き始めて・・・」

「それ、本当か、光彦！！？」

「はっ、はい。そう僕の母親が言っていました」

確か俺ん家の電話は全部博士のところに行くようにしてたんだよな・・・誘拐されたのは俺と親しい蘭と

家が隣な灰原・・・

おいおい・・・ひょっとすると、これは二人共俺絡みで誘拐されたって事じゃねーのか！？

灰原を誘拐したのはたぶんその電話が原因なんだ。ただの隣人ってだけで誘拐されるはずがない、その男はきつとわざわざ俺の家まで来て電話をかけたが繋がらず、変わりに工藤邸にかけるたびに隣の家の電話になる・・・俺が博士の家に住んでも思ったのかは

わからないが・・・犯人の目的は俺だ・・・

「くそっ、俺のせいで蘭と灰原が・・・」

「コナン君、哀ちゃんと蘭お姉さんが誘拐されたのは悲しいけど、コナン君のせいじゃないよ！悪いのは犯人だもん！」

「あっ、いや・・・はっはっそうだな・・・」

「そうだよコナン君元氣出して！」

歩美は笑顔で言った。歩美ちゃんはそう言うけど、俺のせいなんだよ本当は・・・とは言えずコナンは齒がゆい思いでいた。

## 第18話 目的（後書き）

もうお忘れになられてると思いますが・・・クラウドディアです。本当はもうこれは終わりにしようと思わないつもりだったのですがどうしても最後まで書きたくなりました・・・作者のわがままのせいですみません。更新は遅いでしょうが（1ヶ月に一回かも）少しでも書いていきたいです。私だって書きたいのですがちょっと時間が・・・1日が28時間くらいあれば・・・（読者のみなさんごめんなさい）



## 第19、20話 容疑者

### 第19話 容疑者

#### 博士の家

「よし、こいつらが俺の事件にかかわった人で今回の誘拐事件に係ありそうなやつだな」

俺の前に置いてある机に並べられた写真入の資料、

だけど、その数が多いこと、つくづく俺って恨まれてるんだな・

・

その人数ざっと50人・・・いや、もったか？これでもかなり絞ったんだそうだ

うゝん・・・タイムリミットまでに調べ終わるのだろうか？一応まだ時間はあるけど・・・

「何言ってるんだよ、コナン！オメーじゃなくて・新一さんの事件・だろ！」

元太が俺の発言を訂正した。

ったく元太も歩美も変なところで俺の言った事気にするんだからなあ・・・ったく

普段俺と灰原が黒ずくめのやつらの事話してても気にしないくせに・・・まあ、今はどうでもいいか

推理に戻るとして、灰原が一度俺に電話してきた時、確かにあいつは米花駅の向かいと言っていた・・・

だが、そこには実際は灰原と蘭を監禁できそうな場所はない・・・もしかしたら車に乗っていたのかもしれない、あの時灰原の様子は

どこか変だった。葉か何かを嗅がされて意識がもうろうとしていたのかも・・・それに米花駅の向かいには確か広い道路があったよな・

俺がそんなどうでもいい事と真面目な事を考えている間にも時間は過ぎていく、

なのに俺はただ博士の家のソファに座っていた。

容疑者が多すぎる、手掛かりも少ない、いつもなら容疑者がその家の住人多くても6人くらいに絞られているのに・・・警察にまかせるしかないのかあ

こういう時、俺も警察や刑事だったらなあ・・・って思ったりする。

## 第20話 容疑者

歩美達と会ってから2時間がたった。時刻は午後6時03分。不思議とこういう時は時間がたつのが早いものだ。

（ああ、けど本当は作者がその間の2時間を作れなかったからいきなり時間がたったんだろうな・・・俺の時間っていったい・・・）

その2時間の間に警察が連絡がとれない、又はアリバイがない容疑者に絞った。

あくまで『警察が』であり、コナンは何もしていない。  
名探偵なのに・・・

連絡がとれないのは

時雨沢 恵一

青山 剛昌

高山 みなみ（たかやま みなみ）

林原 めぐみ（はやしはら めぐみ）

の4人だけだった。

時雨沢恵一は妹の罪を俺が暴いたんだっけ、たまたま行った旅先で仲良くなったんだっとな

・・・本当にたまたまだぜ、偶然事件が起きたんだからな、偶然って恐ろしいよな・・・

だけど本当に恐ろしいのは偶然がかさなる事だ。

だが問題なのは・・・後の3人だ。思い出そうとしても思い出せない特に2番目の人 どこかで会った気はするけど・・・警察の資料には、『警視庁取材事件』と名うってあるが、

次に3番目の人・・・こっ・・・この人は・・・！！！！

えーっと、覚えてないなあ・・・

## 第19、20話 容疑者（後書き）

時雨沢 恵一・・・知ってる人、いますか？

キノ旅とかアリソンを書いているライトノベル作家です。

キノの旅、好きな人誰かいらないかなあ・・・

林原さん、灰原の声優さんですね。私この人すごく好きなんですよ！  
！哀ちゃんの声ってかわいいですよね！

## 第21話 助けて

時雨沢 恵一

青山 剛昌

高山 みなみ

林原 めぐみ・・・この4人の中に犯人はいる！

第21話 助けて

「・・・工藤君か？」

だいぶ日は落ちたころまた犯人から電話があった。

「ああ、俺だ・・・灰原と蘭は、まだ無事なんだよな？・・・」

「・・・・・・ところでタイムリミットまで後4時間半だよ。どうだい？私を見つけれそうかい？」

犯人は俺の質問には答えなかった。1番大事な事だっというのに・・・

「ああ、もう目星はついてるんだ。必ずお前を捕まえてみせる。そして蘭達も助け出す！」

「本当にそううまくいくと思っているのかい？2人共助けられるとでも？君の場合は一人でもまた会う事が出来るんだからいいじゃないか・・・私は娘と妻・・・両方に会えなくなってしまった・・・その気持ち君に分かるかい？それもすべて君のせいなのだよ・・・」

「何！！？・・・おい、どういう事だ？！俺のせいだと？！」

少し間をおくと、また犯人は俺を無視して話しだした。

「・・・・・・・・・・まあ、そうだね・・・最後にもう一回くらい話させてやってもいいかな・・・  
選ばれなかった人にとっては、これが本当に最後の君との会話になる訳だしね・・・」

それから犯人は小声で何かぶつぶつ言うと言電話の奥でもの音がした。  
きっと犯人が蘭と灰原に電話を渡すかしたんだろう。

「新一・・・新一・・・」

最初に電話に出たのは蘭の方だった。

「蘭・・・待ってろよ、俺が助け出すまで！」

「うっ、・・・・・・・・うん・・・私、新一の事信じてるから・・・でも、  
もし間に合わなかったら哀ちゃんを選んでね。哀ちゃん・・・まだ  
小さいのに・・・」

もしかして、泣いてたのか？・・・蘭・・・  
蘭の声はコナンがそう思うほど弱弱い声だった。

「ああ・・・お前はただ、俺を信じて待ってればいいから・・・」

「新一・・・もっと新一と話してたいけど、哀ちゃんに代われって  
言われたから代わるね・・・」

☆本文だけどあとがき☆  
作者の小説ノートの落書きより※暇ではない方はお戻りください。

コナンと哀はゲームの中に入っていた。

ジン..「久しぶりだな、シェリー」

哀..「どうして、ここにあなたがいるの!？」

ジン..「それは、私がお助けキャラだからだ!!! ハッハッハッ!  
オホッホッホッホッ!」

哀..「今日はすごく自信満々なね... ってジンはそんな笑い方  
しないわ! 特に最後のホッホッホってなによ! お助けキャラにあ  
るまじき笑いだわ」

ジン..「あつ... 笑いはさて置いて、今日は勇者コナンにすてき  
なアイテムを持ってきた...  
フッフッ、その名は...  
高機能スペシャルバケツ!!!」

後ろで変な効果音が流れる。

コナン…「スペシャルも何もただのバケツだろ・・・しかも小さっ  
！！！！底のシールに幼児用って書いてあるんだけど・・・」

ジン…「何を言うか！お前は今幼児だろ！」

コナン…「はっそうだった！俺は今幼児なんだっけ・・・いやでも  
これはどう見たってもっと年下の・・・はっ！対象年齢3歳って書  
いてあるじゃねーか！！おまけにゾウさんシール貼ってあるし・・・  
」

ジン…「まあ、細かい事は気にするな、これはなにせ、『スペシャ  
ル』だからな！」

コナン…「スペシャルっていうけど、どこら辺がスペシャルなんだ  
？」

ジン…「見て分からないのか？よく見てみる、なっ、なっ、なんと  
前回よりパワーアップして体積が

2.7立方センチメートルも増加している！！！」

コナン…「前回って、今回が初めてだろ！こんなアホらしい場面何  
度もあってたまるか！！！」

それに2.7って・・・微妙だよ、それじゃあ消しゴム一個分多く  
入るだけだろ！！！！？」

ジン…「ああ、その通りだ・・・よく気がついたな！！しかも2.

『7』だから詰めれば消しかすも充分はいるのだ！！！」



哀・コナン・・・・・のだ？・・・」

コナン・・「あのなあ・・・」

哀・・「あら、とっても便利ねよかったわね江戸川君♪」

コナン・・「何だよ人事だと思って」

ジン・・「フッフツ、大丈夫だ、シェリーそう羨むんじゃない・・・  
・・・君の分もちゃんととってあるぞ！！！！」

哀・・「嘘でしょ・・・」

## 第21話 助けて（後書き）

上の『本文だけどあとがき』は夜眠くて作者の精神状態がいつもと違う時に書いた作品・・・あの時私はいったい何を考えていたのやら・・・

## 第22話 助けないで

「工藤君・・・？」

蘭から電話を渡された灰原が電話に出た。蘭と違って怯えている様子ではなかった。

冷静で少年探偵団の副リーダー的な、いつもの灰原だ。

灰原は俺が話しかける時間もくれず話出した。

「いい工藤君、よく聞いて、絶対彼女を選ぶのよ。私の事は心配しないで、あなたは彼女を選べば・・・それでいいのよ。わかった？」

「灰原・・・けど、お前は・・・」

「いったでしょ？ 私はいいの・・・」

「そんな訳・・・」

コナンは『そんな訳ないだろ』そう言いかけたが彼女がまた喋りだしたので言えなかった。

「だって私は・・・・・・」

灰原はそこで一旦言葉をきった。

たぶん次にくる言葉は・・・コナンにはだいたい想像がついた。

まだ出会って半年もたってないけど、こいつが考えてる事はいつだって・・・

「……私に必要な存在だから……」

こんなふうには自分の事を考えられない灰原、

灰原が必要のない存在な訳ないだろ……

博士だって、あいつらだってみんなお前を必要としてる。

それに俺だって灰原がいると……

「……灰原……」

言いたい事はたくさんある、たくさん慰めてやりたい、

そんな気持ちでいっぱいなのに

けど俺はなんて言っていないか分からなくて

何も言えなかった……

それから犯人が灰原から電話を取り上げると

こう言った。

「どうだい？参考になっただろ？君がどちらを選ぶか楽しみにまっているよ……」

そうして電話は切れた。

俺はまだ犯人を捕まえる気でいた。いつもそうだったし、

選ぶつもりなんてないけど……もし、もし本当に捕まえられな

かったら……

俺は……

## 第23話 見つからない

選ぶつもりなんてないけど・・・もし、もし本当に捕まえられなかったら・・・

俺は・・・

「あーっ、もう！今は推理に集中しねーといけないのに！・・・」  
選ぶなんて何考えてるんだ俺・・・

「ねえ、コナン君犯人は何か手掛かりになるような事言ってなかった？」

さっき到着したばかりの佐藤刑事がコナンに話し掛けた。

「うん、犯人が新一兄ちゃんのせいで娘と妻に会えなくなったって言ってたよ。それを新一兄ちゃんのせいだって・・・」  
・・・はっ！そうか！！！！

「じゃあ、犯人は・・・」

「ああ、・・・だろーな・・・」

・・・わかったぞ、確かあの人はつかまった後、奥さんと娘さん二人とも事故で亡くしてる  
けど、どうしてそれが俺のせいなんだろうか

「よし！！！！これで事件解決だな」  
元太は元気よく言った。

元太達少年探偵団は安堵の表情を浮かべていた。

「そうだね。犯人さんわかったし、哀ちゃんもすぐ戻ってくるよね！ねっ？コナン君？」

「コナン君？・・・」

「いや・・・まだ分からない・・・」

「えっ、どうしてですか？犯人はわかったんですから、後は捕まえるだけじゃないですか」

「もうあまり時間がないし・・・犯人の居場所も見当もつかない」

「そんな・・・」

そう犯人の正体は分かった、動機もなんとなくだけど・・・  
だが犯人はどこに居るんだ？それさえ分かれば・・・

「ハアハアハア・・・くそっ・・・何でだ・・・」

コナンは必至に探していた。町中、もう探すところがなくなるんじゃないかと思うほどの勢いで

警察も探してくれてるし、博士や少年探偵団まで探してるって言うのに・・・

なんで見つからねーんだよ。

犯人の自宅も行ったし、犯人が日頃よく行ってた場所や知り合いの家も全部回った。

「なのに・・・なんでだよ・・・なんで見つからないんだよ！」

時刻は9時41分・・・

タイムリミットまで後、2時間20分

もうとくに夜だった、明るかった昼間と違って探しにくい。

調べようと思った店も閉まっていた・・・

「新一！どうじゃった？」

向こうから博士が走ってきた。

「いや、ダメだった・・・」

「そうか、ワシのところもじゃ・・・」

「ん？博士、今日何かイベントがあるんじゃないか？ほら病院の改装記念とかだったっけ？・・・」

「ああ、あれか、しかし、哀君が誘拐されたと言うのにワシだけイベントに行くのは・・・」

「いいんじゃないか、ずっと楽しみにしてたんだろ？灰原も帰ってきたときそっちの方が喜ぶぜ、

灰原は俺が探しとくからよ」

「新一・・・わかった、じゃがワシもぎりぎりまでは探す事にする。次はどこを探せばいいと思うか、新一？」

10時15分

俺は博士と共に犯人の昔親友だったという人の家に来ていた。

インターホンを鳴らすと、中から40代ほどの男性が出てきた。

男はだるそうに「またかよ・・・」と頭をかいた。

「あんたかも、ほらあれだろ、あいつの事件を調べてんだろ？勘弁してくれよ俺は何もしらねーってのに・・・」

「ねえ、おじさん、あの人がよく行きそうな所って分からない？」

「さーなあ、俺達は確かに昔からの付き合いだけどここ1年はほとんどど会ってねーからよ。理由も仕事が忙しいからって言ってたしな、俺も今年はいろいろあって忙しくてな・・・」

「そうですか・・・他にあの人と親しかった人はいますかのお？」

「後、何でもいいから、趣味とか、小さな事でもいいから、手掛かりが欲しいんだ！」

「親しい人かあ・・・妹にはよく会いに行ってたみたいだけどなあ」

妹・・・俺が捜査のために一番に行った場所だ。あの人の妹は○○○  
○病院で働いてるんだったよな・・・

「趣味は・・・仕事が趣味みたいなもんだしなあいつは・・・まあ、俺が話せる事はそれぐらいだ。  
後は警察に聞いてくれ、」



そう言ってその人は玄関に掛かっていた時計を見た。

「やべ、10時半じゃねーか、俺明日は大事な会議があるから朝早く起きて準備しようと思ってたのによ、じゃあな、じいさん、ボウズ」

その人はそう言うのと慌しく扉を閉めた。

10時半・・・か・・・

「新一、もうあまり時間がないぞ、どうするんじゃない？」

「大丈夫・・・だ。それより、博士はそろそろ向こうに行ったほうがいいんじゃないのか？」

「ああ、もう行くが、最後に聞かせてくれないか？本当に哀君を助けられるんじゃない？新一」

「ああ・・・」

正直いってコナンはだんだん自信がなくなってきた。それはきつと声にも現れていたと思う

「それと、もしあれじゃったら・・・」

「博士・・・んな事にはならねーよ」

博士が言いたいのは、もし時間がなくなったらどちらを選ぶのかと言う事、それともどちらも選ばないのか。

理屈で言うとな答えは簡単かもしれないけど、

でも・・・選べると言う現実、選ばなかったら二人共殺されると言う現実・・・

どれも本当で、きっと人を選んだりしてはいけないのかもしれない。

救う奴を選ぶって事は殺すやつを決めるって事だ・・・

俺には出来ない・・・本当に？・・・

## 第23話 見つからない（後書き）

『習字のお時間！！！』という別の連載を始めました。よかったら  
見てみてください☆

## 第24話 悪い、灰原

時刻は10時45分

コナンはもちろんだが搜索を続けていた。

「ねえ、本当に見てない？そういう格好した人と若い女性と7歳の女の子・・・」

「さあ、ねえ・・・店が開いてる間はずっと中にいるから・・・」

「そうですか・・・」

「ごめんね、坊や、役に立てなくて」

「いえ、ありがとうございました」

どうする？

俺は今どうすればいいんだ？

・・・一旦博士の家に戻るか

11時04分

俺は博士の家に帰った。

少し疲れたし、それに何だか俺には手におえないような気がしてきた

俺は博士の家のソファアに深く身を沈めた。今はこの家には俺以外誰もいない

もう、何かすべてが夢だったような気がする

蘭と灰原がさらわれた事や警察ざたになって探してる事とか

俺が探偵だった事も、今俺が存在する事さえも・・・

俺は今何をしてるんだっけ？

博士の家のソファアに座って・・・考えてる、いろいろと

俺に何ができる？

二人を探す事・・・だけど、俺に二人が見つけれられるのか？  
タイムリミットまで1時間をきってるんだぞ

『私、新一の事信じてるから』

『哀ちゃんを選んでね』

『新一！助けて！新一！……！』

……蘭……

『泣いてなんかられないよね。私、新一の恋を応援しなきゃいけないに』

『新一には幸せになってほしいから・・・』

助けて！

『俺を信じて待ってればいいから』

約束したんだよな・・・信じて待ってろ、よくこんな事いえたな俺・  
けど約束したんだよ。蘭と

『工藤君？』

『私はいいの』

『必要のない存在だから』

・ ・ ・ 灰原 ・ ・ ・

『私の事は心配しないで』

ったくあいつらしいって言うか ・ ・ ・

絶対彼女を選ぶのよ

俺はどうすればいいんだ、選ばなきゃいけないのか？

何故？

俺は二人共好きだし大事なやつなんだ  
なのに、どうして・・・

『傷つかない・・・かな』

選べなんて言わないよな・・・

『私気づいたんだ新一の事好きだけど、恋人になりたいんじゃない  
って・・・』

無理なんだよ・・・

『あっー、もうお前じゃなきゃダメなんだよ！』

見捨ててるなんて・・・

『新一の口から直接聞きたかったな』

もし選んだら俺は人殺しか？・・・



『私は別にいいのよ。例えば私と貴方が恋人だって噂になってもね』

選ばなければ二人共・・・二人も失いたくない  
自分の命じゃないのに勝手に決められない。

助けてって言われたんだ。助けなきゃならないやつがいるんだよ。

『・・・コナン君？』

・・・ら・・・ん・・・

・・・蘭・・・

『彼女を選ぶのよ！』

助けて、新一・・・

彼女を選ぶのよ

助けて

彼女を選ぶのよ

助けて

彼女を選ぶのよ

助けて

新一！

けど、灰原が・・・『彼女を選ぶのよ』  
本音じゃないってわかってるよ  
助けて欲しいってわかってる。けど

『あなたは彼女を選べばそれでいいのよ』

助けてほしんだろ？ だったらそう言えよ

まるで、俺に蘭を選んでほしいみたいに言うなよ

助けて

その時俺の携帯が鳴った。

俺はポケットから携帯電話を取り出した。

「工藤君、調子はどうだい？ 私はいいいよ。君が私を捕まえないでいてくれるからね。もう降参かい？」

その時、電話の向こうで騒がしい人の声がした。  
それからスピーカーで何かを話す声・・・

「んな訳ねーだろ。お前を捕まえてみせるさ・・・」

「そうか・・・でも、もう選ぶころだと思ってたけど。今君が選んでも、もう一人が殺されるのは零時ちょうどだから、奇跡が起き

たら二人共たすけられるかもしれないよ・・・」

奇跡・・・俺に起こせるだろうか

「まあ、選ばなかったらもちろん両方殺す訳だけど、どうするかい、工藤君？」

助けて新一 助けて新一 助けて新一 助けて新一 助けて新一

「わかった。選ぶよ・・・助けて欲しいのは・・・らっ・・・」

『私の気持ちも少しは考えてくれないかしら？』

『悪い・・・灰原・・・俺、自分の事しか考えてなかった』

本当にそうだ。俺、お前の気持ち全然考えてなくて  
まさに、そうだな・・・

悪い、灰原

ごめん、蘭

俺は・・・

## 第24話 悪い、灰原（後書き）

みなさんはコナンにどっちを選んでほしいですか？

蘭？それとも灰原？

実はどっちの話も考えてるのでちょっと迷ってるんですよ。  
一応はどっちって決めてるんですけどね。

## 最終回・・・かもね

「助けて欲しいのは・・・らっ・・・いや、灰原・・・哀を・・・返してくれ」

「・・・わかった、いいだろう今から〇〇駅の裏に行くといい、そこにこの子を置いておく・・・」

そう・・・俺は灰原を選んだ。選んでしまった・・・だって、仕方ないだろ、

助けないでって言われたら・・・必要のない存在だって言われたら・・・

助けたくなるじゃねーか・・・

今ここで選ばなかったら、本当に、俺まであいつが必要のない存在だって認めるみたいで・・・

そんな事ないのに・・・けど、きっとあいつはそう思うってしまうだろうから・・・

もし、ここで俺が灰原・・・哀を選んだら、  
あいつがもっと自信を持ってまた笑ってくれるような気がしたから・・・

次こんな事があった時は、自分から助けてって言えるお前にしたい・  
・・・

正直言つて、こんなに灰原の事を気にかけてたなんて、知らなかった。

普段をなんとなくで過ごしていたから気づかなかったのかもしれない。

俺はあいつに何をしてやれるだろうか・・・

まずは叱ってあげよう

何かあったらちゃんと助けてって言うんだって事を・・・

俺が教えてやらないと・・・・

その後は、あいつをしつかりと・・・・

俺がそこに行くと、倒れている一人の少女がいた。

「哀・・・・哀!!!」

俺が駆け寄ると哀はゆっくり起き上がった。

「工藤君・・・はっ、私・・・どうしっ・・・きやつ」

俺は灰原にいきなり抱きついた。しっかりと、もうどこにも行かないように

「くっ、工藤君・・・何?・・・どうなってるの」

「・・・を選んだ・・・」

「えっ?・・・」

「・・・お前を選んだ・・・」

「なっ、どうして!?嘘でしょ、彼女は!?!」

哀は慌てて俺から離れようとした。だけど、俺はそうはさせなかった。

哀を選ぶ時そう決めたから・・・しっかり抱きしめてやるって・・・

「蘭は・・・選ばなかった・・・」

「あなた、何考えてるの?私があれば彼女を選びなさいっていったのに!?!」

「ごめん・・・お前は俺に蘭を選んで欲しかったのかもしれないけど、俺はお前を選びたかったんだ。悪いな、哀・・・」

「・・・どっ、どうして、どうしてよ！彼女は、あなたの・・・大切な人なのに・・・」

「違うんだ・・・」

そっか、哀は俺が本当の気持ちに気が付いた事知らないんだっけ・・・

「俺と蘭は違うんだよ。確かに俺は蘭の事を大切に思ってるけど・・・もっと、大切なもの。守らなきゃならないやつを見つけたんだ・・・前に蘭と話した時・・・」

「聞いた・・・蘭さんから聞いたわ。その事・・・でも、どうしてなの？私のせい？私があなをこんな姿にしてしまったから？！」

抱きしめているので、コナンには哀の表情が見えなかったが哀は今にも泣きそうな顔をしていた。

「分かってるわ！すべて私が悪いって事・・・けど、お願い・・・そんな事言わないで、あなたまで・・・幸せを捨てる事はないのよ！・・・」

コナンの肩に冷たい雫が落ちた。

「哀・・・哀・・・落ち着けよ。お前がわるいんじゃない。誰も悪くないんだ。」

それに俺は幸せを捨てた訳じゃない。もっと大きな幸せを掴むために挑戦する事にしただけだ」

「もっと大きな幸せ？・・・」



哀の髪が、俺の頬にあたった。哀の体温が伝わってくる。

温かくて・・・ずっと昔からこうする事を望んでいたみたいに・・・

耳をすませば心臓の鼓動まで聞こえてきそうだ・・・

本当にさっきまで、こいつが犯人に捕まってたなんて嘘みたいだ・・・

「お前だよ。俺の幸せ・・・今分かった・・・お前を抱きしめるまで不安だったけど、  
やっぱり、哀だったんだ。俺の探してたやつ・・・」

「どういう事？・・・」

「・・・」

「工藤君？・・・」

「あっ、ああ、えっと・・・だから・・・」

ここまできいて何だけど・・・、何か・・・恥ずかしくなってきた・・・

あっ！俺、本当に今さらだな・・・  
抱きしめて、いきなり哀って呼んどいて・・・

っと言うより、何でいまさら、『どういう事?』なんて聞くんだよ!?・・・

普通分かるだろ・・・デートに誘った時も軽く受け流してたし・・・こいつ・・・

「ほら、行くぞ、蘭を助けに!」

俺は立ち上がって哀に手を差し伸べた。

「えっ、じゃあ、あなた分かったの?!」

「ああ、けど一応な・・・」

「まったくあきれたわ・・・二人共助けられるって分かったのに・・・そんな事言うなんて・・・」

「けど、俺も犯人が最後に電話してきた時にやっと分かって、けどあの時はまだ自信がなかったんだ。今、高木刑事達が向かってる。もし俺の推理がはずれてたら・・・って可能性もあるしな・・・」

「そう・・・」

「なあ、その紙袋、お前の？」

哀が倒れていた近くには綺麗な紙袋が置いてあった。

「えっ、ええ・・・あなたに、渡そうと思って・・・」

「俺に?・・・」

哀はそう言って紙袋のところまで歩いて行き、袋を少し開けて中身を覗くとまた、またきれに紙袋の上を折り、俺に渡してきた。

「こっ、これ、お前が?・・・」

中にはおそらく哀の手作りであろうテディベア・・・

「迷惑でしょうけど・・・あなたに・・・」

「哀!・・・うん。哀にしようぜ、このクマの名前!毛の色とか目とか哀にそっくりだしさ」

「そっ、そう?・・・」

—よろしくな、哀—

『終わり』

その後……

「哀、何してんだ？」

コナンは座っている灰原の後ろから抱きついた。

「ねえ、工藤君？」

「何だよ、哀」

「いつから私の事哀って呼ぶ事にしたの？」

「何だ？ 哀じゃ不満なのか？ 志保にしようか？ ……し・ほ・…」

「……ちっ、違うわよ。そう言うことじゃなくて……」

「じゃあ、なんて呼ばれたいんだよ。志保ちゃん？ とかか？ 俺は別にそれでもいいけど……」

「・・・お願い、それだけは止めてちょうだい・・・虫唾が走るわ・・・」

「んじゃあ、哀でいいんだよな♪・・・あゝい!」

「・・・わかった、いいわよ。けど学校で抱きつくのは止めて・・・すごく不愉快だわ・・・視線が痛いしね・・・」

「気にするなよ、みんな俺達の仲のよさに嫉妬してるだけじゃねーのか?」

「あなたって・・・はあ、離してちょうだい、席を立ちたいの」

「うゝん、どうしようかな・・・」

「離して!」

バシッ!!!!

灰原はコナンの足を思いっきり蹴ってやった。

「痛ってー!!!!何すんだよ!!!!」

「あなたが離してくれないからでしょ!?!」

「つたく、80代のババアのくせして力だけはあるんだな・・・」

「・・・何か言ったかしら、江戸川君?」

「いや、何も・・・」

こうして哀とコナンは結ばれたのでした。なーんてね・・・

## 最終回・・・かもね（後書き）

今まで小説を読んでくださって、ありがとうございました。本当に感謝、感謝です！当初予定しておりました話とだいぶ変わっていて自分でも驚いています。nextの方は前とだいぶ雰囲気が変わってて心配だったけど、何とかなりました！みなさんコ哀と作者をいつまでも暖かな目で見守ってってください・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9208a/>

---

テディベア NEXT

2010年10月10日14時04分発行